

2014年5月18日 13:30～

お茶の水女子大学

大学本館 306 室

パネリスト

**川田牧人** (成城大学教授)

「それでもエスノグラフィーする人類学者の言い分」

**菅 豊** (東京大学教授)

「民俗学における多様なエスノグラフィーへの挑戦」

コーディネーター

菅 豊／塙原伸治（東京大学特任研究員）

現代民俗学会 2014 年度年次大会シンポジウム

# 民俗誌はもういらない? 現代民俗学のエスノグラフィー論

日本においてエスノグラフィーは、フィールドワークを基盤とした調査研究の成果を公表するメディア＝民族誌として受けとめられる場合が多い。しかし、エスノグラフィーは本来、調査研究を行うフィールドの選定や研究対象の発見といった初期段階から、地域や人びとのアプローチの方法、収集データの整理・分析法、さらに記述法、記述メディアの公開法といった最終段階までに至る、多局面に関わる研究行為の方法を総合的に捉える概念である。それは情報のインプットからアウトプットという研究プロセス全体と密接に関わっているが、しかし単なる情報収集の個別メソッド、あるいはテクニックではなく、フィールド科学を標榜する研究者の姿勢や感性、そして内在する問題意識なども問う全体的な「方法」なのである。

民俗学では、このエスノグラフィーという言葉にはあまり馴染みがない。それよりも記述範囲が限定的なメディア＝「民俗誌」という、かなり特殊な用語でエスノグラフィーに類するものを捉えてきた。かつて、1920年代にまとめられた爐邊叢書という珠玉の民俗誌シリーズは、その時代において手法的に独創的であり、斬新であり、個性的であり、そして挑戦的であった、と評価できるのだろうが、残念なことにその後、民俗学者によってそれは方法として高められることはなかったし、自覚的に継承されることもなかった—その現在的な価値や方法的可能性は未知数である。また、1960年代末から始まり、1970～80年代に活発化し惰性化した自治体史という文化ドキュメンテーションの特殊な運動もまた、書かれたものの価値やその方法の有効性、あるいは限界性なども十分に吟味されていない。そういううちに、自治体史は下火になり、また民俗誌という言葉を用いて研究する研究者は、もはやほとんどいなくなってしまった。たとえ民俗誌という言葉を使用したとしても、それは特段の意味のある表現ではない。その言葉には、「ただなんとなく」民俗学の書物や研究としての雰囲気を醸し出すだけの効果しかないのである。民俗誌は、もはやその力や価値を大きく減じてしまったようである…。

一方、エスノグラフィー論は、人類学や社会学など、民俗学以外のフィールド科学において、ディシプリンの壁を越えた脱領域的な方法論的課題として長年共有され、またいまも新しい活力を求めてその可能性が共に追究され続けている。民俗学も、そろそろそのようなエスノグラフィー論と同期し、方法論的共有知を獲得し、新しい試みに挑戦しても良いのではなかろうか。

「現代民俗学は、今後いかなる社会・文化叙述に向かうのか？」——本シンポジウムでは、学問の性格論争にまでつながりかねないそのような大問題を、パネリストの発話を糸口に、参加者が自身の経験をふり返り将来を展望する。(文責：川田牧人・菅豊)

### 川田牧人／それでもエスノグラフィーする人類学者の言い分

マリノフスキイによって方法論的体系化が図られて以来、100年にも満たない間に、エスノグラフィーはさまざまな試練をくぐり抜けてきた。とりわけ1980年代の批判の時代以降、あらたな動向が模索されている。発表ではその傾向を（1）グローバル状況下におけるフローのエスノグラフィー、（2）リフレクティブ・エスノグラフィー、（3）ポスト世俗的エスノグラフィー、など近年の動向から探りながら、現代民俗研究におけるエスノグラフィーの意味について議論したい。

### 菅豊／民俗学における多様なエスノグラフィーへの挑戦

エスノグラフィーとは、調査方法論であり、そのプロセス（過程）とプロダクト（成果）の両方を指す（藤田2013）。社会学や文化人類学を中心とするさまざまなフィールド・スタディーズにおいて、どこで、誰の、何を、何のために調べ、どのように表現するのかというエスノグラフィー論が展開され、多岐にわたるエスノグラフィーの方法が提示されてきているが、残念なことに民俗学はそれらの議論から隔絶一孤立一しきっている。本発表ではマルチサイテッド・エスノグラフィー、オートエスノグラフィー、コラボラティブ・エスノグラフィーといった、私自身も試み、また試みようとする方法を素材として、文化のグローバル化状況への民俗学の対応や、民俗学の再帰的あり方、さらに民俗学の現代的な存在意義ともいえる「新しい野の学問」としての性格を検討する。それは、単に民俗学の研究手法を検討するのみならず、民俗学の「学」としての性格を根本から問い合わせ作業でもある。